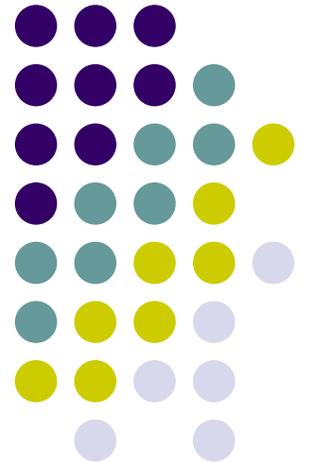
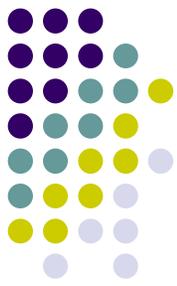


# 中国西南民族史

## 12. 大理国後期の国家体制と 大理国の衰亡 ( ~ 13世紀前半 )

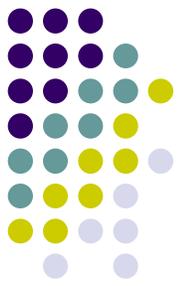




# 大理国の国内体制

- 大理国前期は南詔国後期の体制を継承
- 大理国後期(後理国期)に、とくに地方統治機構に大きな変化

**軍事統治から政治統治への転換**  
(方国瑜説)



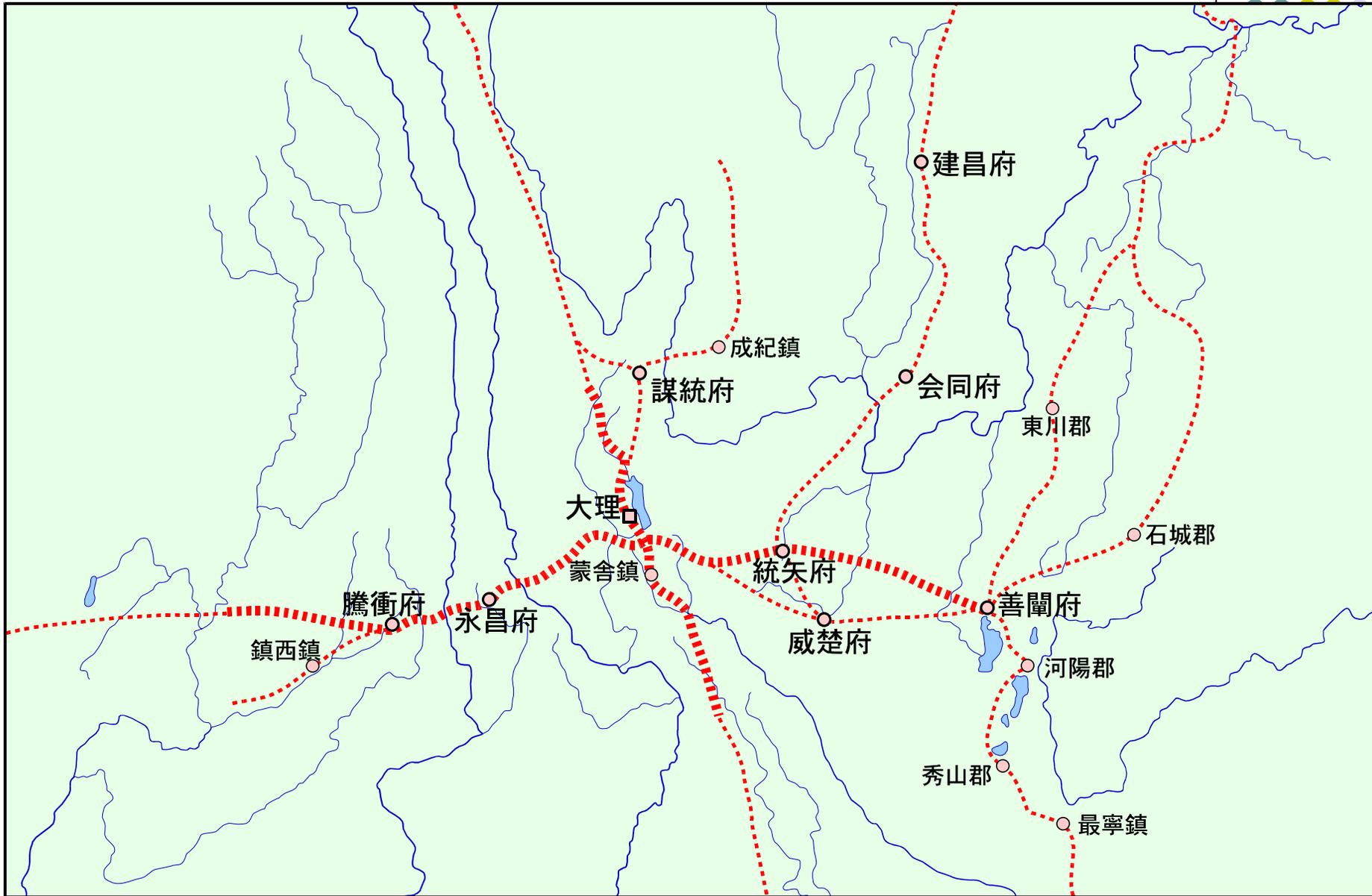
# 地方統治機構の変化

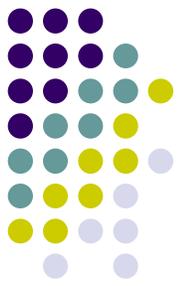
- 南詔国後期～大理国前期：  
十賧、六節度、二都督
- 大理国後期：  
八府、四郡、四鎮、三十七部

四郡：三十七蛮部地域に設置（「三十七部」と重複）

四鎮：辺境の軍鎮

# 大理国後期の地方統治機構





# 節度・都督から「府」へ

- 善闡府(昆明) ← 柘東節度(善闡節度)
- 威楚府(楚雄) ← 銀生節度
- 統矢府(姚安) ← 弄棟節度
- 会川府(会理) ← 会川都督
- 建昌府(西昌)
- 永昌府(保山) ← 永昌節度
- 騰衝府(騰衝)
- 謀統府(鶴慶) ← (劍川節度 義督賧)



# 四郡と四鎮

- 四郡

東川郡(東川)

石城郡(曲靖)

河陽郡(澂江)

秀山郡(通海)

雲南東部の  
三十七蛮部地域に設置  
(「三十七部」と重複)

- 四鎮

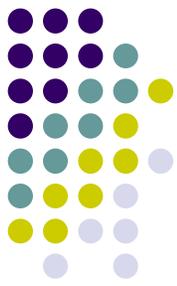
成紀鎮(永勝)

蒙舍鎮(巍山)

鎮西鎮(潞江)

最寧鎮(開遠)

辺境地区の  
軍事拠点



# 「府」の出現時期

『新唐書』南蛮伝の官制に関する記述 (史料12.2)

大府 主将 = 演習 副将 = 演覽

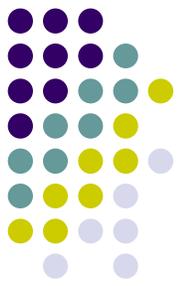
中府 主将 = 繕裔 副将 = 繕覽

下府 主将 = 澹酋 副将 = 澹覽

小府 主将 = 幕撫 副将 = 幕覽

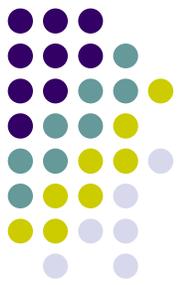
陀酋 = 管記(書記)、陀西 = 判官

- 南詔国後期にはすでに「府」が存在？  
(ただし「主将」・「副将」= 当初は軍事統治)



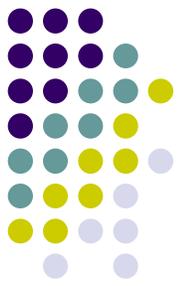
# 「府」の出現時期

- 「弄棟演習」(史料10.6) 大長和国時代
- 弄棟節度 弄棟府
- 「建昌城演習」(史料12.3) 乾徳三年(965)
- 大理国前期には「建昌府」が確実に存在  
「懿宗時」(史料12.4)  
創建は南詔国の成都侵攻時期？
- 「会同府」(史料12.4)「蒙氏に至り、会同府と改む」
- 南詔国時期？ 『元史』の記載には問題あり



# 『元史』の問題点と利用価値

- 『元史』：  
明朝成立の直後に短日時に編纂  
(1369.2月～8月、1370.2月～8月の合計1年)  
**歴代正史(「二十四史」)中もっとも出来が悪い**
- 雲南史料としての問題点：  
元朝後期(14世紀)の記述がほとんどない  
明朝の雲南平定は洪武15年(1382)  
それまでは雲南にはモンゴル政権が存続

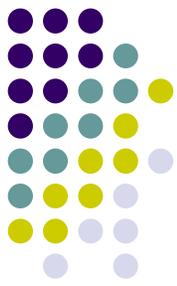


# 『元史』地理志の依拠史料

- 『元史』地理志・『聖朝混一方輿勝覽』などの地理書は唐以来の行政機構の沿革を述べる

大理国で作られた「図志」にもとづく(方国瑜説)

- クビライ軍入雲後「姚枢らに命じて図籍を搜訪せしむ」(史料12.10)
- 末代大理国王段興智の入朝時「地図を献ず」  
(『元史』信苴日伝)

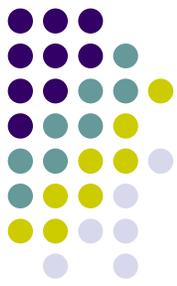


# 地理志の述べる「時期」の問題

(例) 史料12.4の永昌州条

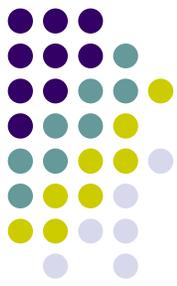
- 「唐天寶末」 : 南詔国時期
- 「至蒙氏」 **大理国前期**
- 段氏興、**高氏專政** : 大理国後期

原史料の「前朝」等の表現を誤解？



# 会同府(会川府)の充実

- 史料12.4(会川路永昌州):  
「蒙氏に至り」(=大理国前期)会同府と改め、  
「五賧」を設置、  
「張、王、李、趙、楊、周、高、段、何、蘇、龔、尹  
十二姓をここに徙(うつ)す」
- 移住 = 宋に対する軍備増強? (段玉明説)



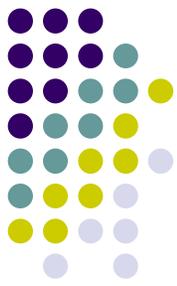
# 「府」の下に「監」を設置する意味

- 統治機構の充実・周到化？
- 首都地区と同じ「監」という名称  
統治の対象は現地民族ではなく、**大理地区からの移民**（「十二姓」）
- 「趙氏を以て府主となす」「王氏これに拠る」「其の子高政に会川を治めしむ」「監主楊大蘭」  
**軍事施設というより入植地の色彩**  
**支配者（府主・監主）も世襲の可能性が高い**



## 他の移民・「臉」設置の事例

- 史料12.5 元江路：「徙白蛮鎮之、名步日臉」
- “ 柔遠路：「其地曰潞江、曰普坪臉，曰申臉焚寨、曰烏摩坪。」
- 12.6 元江路：「蒙氏立威遠臉」
- 12.7 蘭州：「後蒙閣鳳嘗徙善闡楊城堡張、楊、李、趙、何、周、任七姓戍守之」（大理前期？）

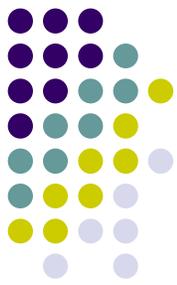


# 高氏の諸子分封との関連

- 高昇泰以後：諸子を各地に分封  
善闡・楚雄(威楚)・姚州(統矢)・鶴慶(謀統)・騰衝  
など  
それぞれの地で「府主」を世襲

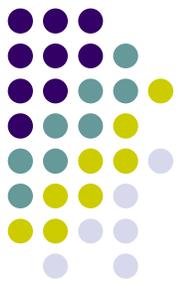
各地への移民の動きと表裏一体？

- 移民活動は大理国前期に始まるが、  
世襲の「府主」出現は大理国後期に本格化



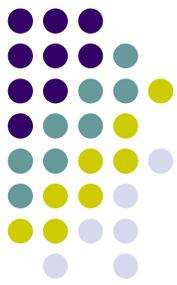
# 「大理国後期の変化」が意味するもの

- 軍政から民政への変化、というよりも  
「洱海地区で形成された『僊人』(白人)が  
雲南各地(の盆地)へ拡散していくプロセス」  
を反映
- 「府主」「賧主」:移民集団の世襲的統治者  
= 「封建領主」に近い存在？



# 僰人の拡散

- 入植先での移民の統治：  
担い手は**僰人大姓**（そのうち最大勢力 = 高氏）  
**高氏奪権時の楊氏の二度にわたる「反乱」**  
= **大姓間の勢力争い？**
- 移住先では現地民族（上層部）の「**白族化**」をも生じた可能性  
「**到处都有白族**」の状況をもたらす  
**現代雲南の人口統計：全県に分布するのは白族だけ**



# 中央における変化

- 詳細な官制・制度は不明

「其宮室・楼觀・言語・書数、以至冠婚喪祭之礼、干戈戰陳之法、雖不能尽善尽美、其規模・服色・動作・云為、略本於漢。自今觀之、猶有故国之遺風焉。」

(史料12.8 = 元代の記述)

唐代以来の漢文化の影響が濃厚に残存

- 仏教の浸透:

「開科取士」の対象は儒仏兼修の「師僧」



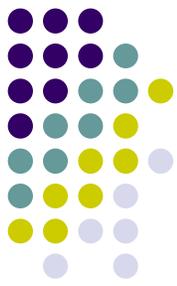
# 張勝温画卷(1180)

- 画像は『宋時大理国描工張勝温画梵像蔵』  
(雲南美術出版社, 2000)などを参照してください

# 大理国時代の写経 (大般若波羅蜜多経)



- 画像は『南詔大理国文物』(文物出版社, 1992)などを参照してください



# モンゴル軍の侵入

## 1252 モンケ、クビライに西南夷討伐を命ず

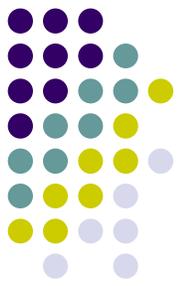
実際はクビライの発案、中国支配・南宋攻略をめざす  
側面から華南をうかがう足がかり

## 1253 チベット東南部より雲南に侵入

遠征軍はウリャンカダイ(兀良合台)が指揮

10月 大渡河を渡る 摩些(ナシ族)は戦わず降伏

12月 高泰祥が抗戦、姚州(統矢)で敗れる  
段氏は善闡に逃れる



# 段氏のモンゴル帰順

1254 ウリャンカダイ善闡を攻め、段興智を捕える

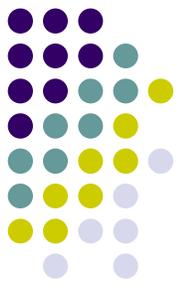
1255 段興智、季父信苴福とともに入覲

1256 地図を献じ、諸部を平定することを請い、  
治民立賦の法を上申

憲宗は喜び「摩訶羅嵯(maharaja)」の称号を与える

実際はすでに称していたものを認可

旧大理国領に対する支配権の承認？



# 大理国の滅亡と段氏の「王政復古」

- 元一代を通じて段氏は「大理総管」を世襲する  
モンゴルによる「王政復古」の一事例
- 元朝は「雲南諸路行中書省」(雲南行省)を設置するがすぐに形骸化、**モンゴル諸王**(梁王・雲南王)が実権を握る(諸王 = モンゴルの封建領主)
- 雲南西部では**段氏の勢力が復活**、モンゴル王との対立状況が明初まで続く
- 1381-2 明軍により梁王・段氏ともに倒される